

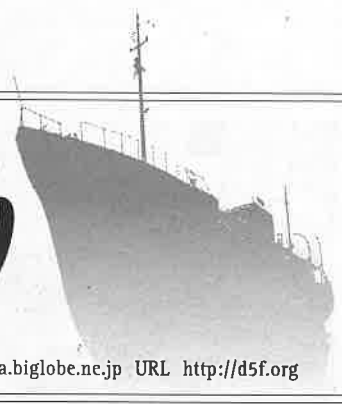
2008.12.01
No.348

(11・12月合併号)

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumar@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



展示館で体験を話す元乗組員の大石又七さん。小中高校生ばかりでなくばかりでなく大学生の見学授業も最近が増えている。

協会設立35周年

第五福竜丸とともに新たな発展を誓い

第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎

「沈めてよいか第五福竜丸」の『声』から四〇年、いま展示館で企画展「原爆ドームと第五福竜丸」が開催されるさなか、財団法人第五福竜丸平和協会は、一九七三年一月の設立から三五周年を迎えます。

この機会に改めて第五福竜丸の保存のために尽力された諸先輩の努力と活動を想起しながら、今後も第五福竜丸とともに原水爆のない未来へ向けて航海を続ける決意を新たにするものです。

*

一二月一日より、新公益法人制度が施行され、五年間の移行期間が設けられています。が、私どもは直ちに「公益財団法人」への移行認定の申請手続きに入ります。

各財団法人・社団法人はこれまで所管官庁の指導・監督に依存することが多かったのですが、これからは全ての

公益法人は法律の定めに基づき、財政面を含めより自主的な運営が求められます。

従来は一部の限られた特定公益増進法人にしか認められていなかった寄附者への免税措置が、今後は全ての公益財団法人に認められることとなります。

それだけに、公益性についての自覚と責任感をもって運営することが重要です。

年間一〇万人以上の方々から来られ、学校からの見学、職場・地域の各種グループ、海外からの訪問など、これらも多彩な来館者の希望に応じた丁寧な対応・案内がますます重要になってきます。

とくに若い人々に対して平和の大切さをアピールできるようにさらに創意工夫を加えることが重要と考えます。

これからも皆様のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

「知り学び、つなげるとりくみを」 ワークショップ「福竜丸を学び伝える」開く

第五福竜丸保存のよびかけ
四〇年を記念する特別展に
関連して、十一月一日にワー
クショップ「福竜丸を学び伝
える」経験と交流」が開かれ
ました。会には展示館と関わ
りの深い教員、学生、協会関
係者など四〇人が参加しまし
た。

はじめに展示館からの報告
として、福竜丸とビキニ事件
をテーマにした小学生の調べ



学習や学芸会、保育園児の劇
などの映像を映写し、館の利
用状況や出版物での紹介、教
科書での取上げられ方などを
紹介しました。

つづいて第五福竜丸元乗組
員の大石又七さんとの交流を
つうじて教育実践をしている
教員三人が報告し、それを受
けて、参加者からの発言など
交流しました。「平和のため
の戦争展」での活動や、中学
時代に福竜丸の模型を作った
経験、平和学を学ぶ学生の感
想などが出されました。

報告より
生徒と第五福竜丸をとも
に学び歩む日々

榛葉 文枝

私は、和光中学校で四〇年
教師をしておりました。一
年生を担当している時に、文
化祭で「平和に生きる権利を

求めて」というテーマで、調
査研究活動を学級展示しまし
た。「第五福竜丸に託した願
い」を受け持った班が、大石
さんにお会いできることにな
りました。一九八三年の秋で
す。あとで知ったことですが、
この時が大石さんが自分のこ
とを語った最初だったのだ
です。中学生になら話してもい
いかなという気持ちになった
そうです。

この生徒の中に、目の見え
ない女の子がいました。大石
さんは、この船のことがわか
らないだろうと、手で触れら
れる五〇分の一の模型をつく
り、和光中学校に贈ってくれ
ました。

生徒がつくった模型船

二〇〇三年度の三年生が、

さまざまなテーマで学習をし
て文化祭で発表することにな
り、そのひとつが自分達で模
型船をつくらうというもの

で、八人の生徒が集まりまし
た。大石さんの自宅におしか
けて、生い立ち、被ばくの体
験などを聞き模型船をつくり
始めました。
生徒たちも一生懸命やりま
したが、文化祭までには完成
しませんでした。福竜丸のよ
うに廃船の道をたどるのか、
と諦めておりましたが、一人
の生徒が自宅に持ち帰り完成
させました。いま展示館の特
別展に展示されています。

未来の教師へ

私は、数学を教えています
ので、担任をもたないと福竜
丸の話などはできないんです
ね。授業のなかでは語れない。
でもそういう私でも、こんな
ふうやってきました。

いま数学の教師を目指して
いる大学生に、数学を教える
だけの教師にならないでね、
と最後の授業の一コマは第五
福竜丸の話します。

福竜丸から学んだこと

冒頭に映像で紹介した劇
「わすれないで」第五福竜
丸（宮城県東矢本小学校・
二〇〇四年）に取り組んだ
教員、阿部真弓さんが東松
島市から参加し、劇を作っ
た経緯や感想を報告しまし
た。

この劇は阿部さんが展示
館を訪れて取材し、絵本『わ
すれないで』や新藤兼人監
督の映画『第五福竜丸』を
下敷きに台本を作り、学年
全体で取り組みました。

劇を通して、子どもたち
は平和への思いを深め、「福
竜丸を知り、平和の大切さ
をよく考えるようになった」
「特別な日にだけ考えるので
はなく、一日一日を、核兵
器を許してはいけない」を
頭において生きていきたい」
と感想文を書きました。卒
業式では、福竜丸から学ん
だことを「ぼくは、久保山
さんの苦しみ、悲しみがわ
かりました／ぼくたちには
平和に生きる権利があると
知りました」という言葉を
お別れの言葉に取り入れ
ました。

実物を訪ねる―保護者と
ともに学ぶ

川口 重雄

私が勤める田園調布学園は、私立女子の中高一貫校で生徒数一三〇〇人。受け持った生徒を初めて卒業させたのは一九八九年でした。

その頃、戦前の建造物が壊されていくことが多く、こうして過去の記憶を抹殺していくのかと、危機感をおぼえました。ふと思いつき、かつて自分が訪ねた第一生命ビル本館ⅡGHQのマツカサー司令官執務室に、生徒を連れて行きました。説明を聞く子たちの顔を見て、これならやれると思えました。希望者を募り、日本史特別講座として見学会を実施しています。

大石さんと出会う

第五福竜丸の見学は九三年から続いています。きつかけは、大石又七さんの『死の灰を背負って』を職員室で読んでいたところ、同僚に「その人は近所のクリーニング屋さんだ」と言われ驚きました。

私は静岡県出身で、事件のことは知ってはいましたが、授

業で教えられたこともなく、すっかり記憶の底に沈んでしまっていたのです。NHKでドキュメンタリー「又七の海」が放映されたこともあり、ぜひ大石さんのお話を聞いてみようと思いました。

展示館を見学し、大石さんのお話を聞いたあと、築地市場駅に設置されたマグロ塚のプレートを見に行きます。

教師みずから楽しむ

子どもたちにとっては、はるかかなた、昔の歴史ですし、保護者でさえ一番若い方で七一年生まれで、事件のことをまったく知らない。そんなこともあり、いまや親世代の参加が増え始めました。

教師も六〇年代〜七〇年代生まれが多い。若い先生に言うのは「思いついたら、どんどんやってみよう」ということです。そしてなによりも自分がおもしろがってやらなくてはと思っています。

第五福竜丸と出会って

齋藤 あずさ

神奈川学園は横浜駅から徒歩一〇分ほどにある女子校で

す。私はこの学校の出身で、現在社会科の教員です。

私が第五福竜丸に出会ったのは中学一年です。「一日研修」の事前学習で先生が紹介してくれた『わすれないで―第五福竜丸ものがたり』に衝撃を受けました。核の脅威を知り怖いと感じながら、第五福竜丸展示館を訪ねました。

歴史と現実の隙間をうめる

一九九五年、中学二年秋の文化祭では、クラスごとにひとつのテーマを決め、研究発表をします。「中学生の視点から矛盾をみつめる」ということで、「核」に決まりました。大石さんの投書が朝日新聞に載っていることを知り、講演をお願いすることになり

ました。大石さんに話していただくことは、痛みを思い出させることです。私たちに受けとめられるだろうかと話し合いを重ね、覚悟を決めました。大石さんの存在は核の問題を「遠い昔の問題」から「今」のことにしてくれました。そして現実の問題としてつきつけられたように思います。大石さんとの出会いは、歴史と現実の隙間をうめる体験でした。

感動をともしにする
昨年母校の専任となり、福竜丸と再会しました。今度は教師として生徒とともに学ぶことの意味を考えました。

人間関係が希薄で、劇場型の情報を受け取ることに慣れている子どもたちに、大石さんの話を、なぜ聞くのかを一緒に考えることにしたのです。「朝の読書の時間」に、毎日少しずつ『死の灰を背負って』を読みすすみ、大変な話を聞くという覚悟をさせました。

展示館からの報告より

第五福竜丸とビキニ事件はさまざまに表現されています。焼津市豊田小学校の調べ学習の報道、江東区辰巳小学校三年生や宮城県矢本小学校六年生の演劇、兵庫県太陽の子保育園の卒園式での劇の映像を紹介。朗読劇やミュージカルの題材にもなっています。

きょう、ここに来る前に当時の担任だった先生から「生徒に伝えたいのなら、教師がまず感動しなければ」と言われました。これからも生徒と感動を共有していきたいと思っています。

修学旅行や社会科見学の生徒たち、自治体や生涯学習での見学者との交流と課題、教科書を始め出版物への登場も紹介。教科書には小・中・高校を通して少なからず写真入りで掲載されています。

ボランティアの会との協働で、来館者と丁寧な人間関係をづくり、語りかけていきたいと思っています。



ワークショップの交流・発言から

三井周さん（協会評議員）
保存運動に取り組んだ者としてみなさんのお話から、若い世代がひきついでくれて心強く思いました。船を保存した、目に見える形で「水爆実験被災の生き証人」を遺して本当によかった。ぜひこれからの活動に生かしていただくさ

い。
山本義彦さん（静岡大学・協会理事）知らない人にとって知らせるかを論議することは、とても大事なことです。そうした意味からも本日のとりくみは、大変よかったです。私も学生を連れて大石さんや見崎さん（元漁労長）の話の聞いたり、展示館を訪れています。何も知らなかった学生たちも「知る」ことで次のアクションが生み出され、視点が広がっていくようです。これはやはりここに船があるという実物教育、大石さんのような当事者からお話を聞けることによるものではない。

高原孝生さん（明治学院大

学・協会評議員）核をめぐる動きが危うい昨今、原点が重要になってきていると考えています。欧米でも草の根レベルの反核運動が再び動きはじめています。本物に出会うという経験はとても大切です。知ることでも実感をもって反対することができ、さまざまなレベルでの動きに対応している。いま、アジアから見ると日本は怖い国に映っています。そうではない動きがあることを、もっと発信しなくてはと思います。

岡寄聡介さん（平和のための埼玉の戦争展事務局長）二五年続いている戦争展には第五福竜丸コーナーがあり、展示館からも資料やパネルを借りています。その年に初めて参加した高校生ボランティアに、ピキニ事件と第五福竜丸のコーナーを担当してもらい、幅広い層の来場者に「わかってもらうように」解説します。答えられない質問に直面したり、「ありがとう」と言われることもあります。く

やしきや嬉しさをバネに、先輩ボランティアにも支えられながら、戦争展初体験の活躍ステージになっています。この経験をとおして、福竜丸のことが他人事ではなくなり、大切な「わたしたちの船」になってくるようです。
今年で七回目になります。エンジンの錆止め塗りが、ボランティアが続いています。この作業への参加で福竜丸に出会う人もいます。主体的に学び、語ることで、感動が行動へと変化するようです。

△若い参加者からのひとこと▽

○君 中学生時代に福竜丸の模型を作った。映像や報告を見て、小学生や中学生が核兵器反対、核戦争防止などということが果たしてわかるんだらうか、と思いました。今

ふりかえって、授業などでも一方の視点だけではなく、さまざまな視点の意見を聞いてみたかった。（学生）
M君 教科書を読むような歴史ではなく、大石さんにお会いして顔を見て会話しながら聞いたことなのでとても印象深かったです。（学生）

A君 僕は大学に入って平和について学びはじめ、さまざまなことを批判的な目を持ってようになつた気がします。まず、知る。ことが大切だと感じています。（学生）
M君 子どもたちの劇を見ていて、戦争はいやだとかストリートな思いや言葉が出てくるのを見て、自分自身もそんな思いから行動していると感じました。（学生）

T君 さきほどもで一緒に来ていたゼミ生はアメリカからの留学生です。展示が日本語ばかりで、理解するのが難しかったようです。ただこのような場があることはとても重要だと言っていました。報告にもありましたが、日本語以外の配慮がもっとあると、広がると思います。（学生）

△館のガイドから▽
ボランティアの会の遠藤昌樹さんは「教員を退職後に会に参加し、展示館に来る子どもたちに話しています。さまざまな学校が来館し、どんな学習してきたかとか、興味関心もつかまずに、会った瞬間の判断で話さなくてはなら

ない。まだまだ手探りなので、ぜひみなさんの意見を教えてほしい」と発言。ほかのボランティアからも今回のワークショップが「新鮮だった」「来館する学校の取り組みがわかってよかった」との感想が出されました。

△まとめとして▽

コーディネーターの藤田秀雄協会副会長は、「大石さんは学習の助っ人であると同時に、実践や成果がまた大石さんにも反映している」と指摘、「教育活動とは未来を語ること。核問題の過去と現在を知るとともに、展望を語り合うことも大切」と話しました。また「第五福竜丸展示館は核実験に関する唯一の博物館であり、最大の環境破壊である核汚染を考えることのできる場所。環境教育でも活用してほしい。また木造船の展示としても貴重であり、世界の反核運動の歴史を調べることもできる博物館なので、さまざまな側面から幅広く学習に使ってほしい」とのべ、このよう

な取り組みを続けよう」とまとめました。

バルト3国から チェルノブイリ 被曝者来館

一〇月三一日午後、展示館をバルト三国のチェルノブイリ原発事故の被害者の会の代表四名が、支援団体の案内で訪れました。一行は、川崎昭一郎会長の案内で見学、ビキニ事件の経緯やマグロ騒動や放射能雨、原水爆禁止の運動の広がりなどについて説明を受けました。



展示館を見学するバルト三国代表

来館したのは、エストニア・チェルノブイリ協会のヤーン・クリナル会長（54歳）、ラトビア協会のアーノルズ・ヴェルゼムニエクス会長（66）、マリス・ソツプス副会長（58）、リトアニア・チェルノブイリ運動のゲディミナス・ヤンチャウスカス議長（46）と支援団体のエストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金（杉並区・故大石武一、吉田嘉清代表など）のメンバーら七人。

一九八六年四月のチェルノブイリ原発事故では、汚染処理や復旧作業のために旧ソ連全土から七〇〇九〇万人の軍人や市民が動員されたといわれています。バルト三国からも約一万八千人が送られ、被曝の影響は、甲状腺ガンや後遺症となつて現われているといえます。四人も二〇九カ月作業に従事しました。

九一年にバルト三国は独立しましたが、健康被害などへの保障や援助は不十分で、健康問題、失業、子どもへの被害、生活苦など深刻です。

ヒバクシャ基金は、九〇年八月に発足し、市民の募金による医薬品の寄贈や代表の招聘、広島・長崎での医療研修などの活動を続けています。今回も広島・長崎市長、日本被団協代表との懇談や被曝者との交流をおこないました。

四人は、展示館の見学の感想を「言葉が出ないほど辛い気持ちになった」「核を使う戦争を二度と起こしてはいけない」と語り、被曝者の実情は、厳しいが「日本の支援や交流を通じて医療体制や保障を前進させていきたい」と感謝を述べていました。



当時作業に使われた薄っぺらの防護服・写真提供同協会

企画展開催でNHKが原爆ドームの映像復元

一二月二一日まで開かれている「原爆ドームと第五福竜丸」市民が守った平和遺産」の展示に、四三年前に放送されたNHKのドキュメンタリー番組が上映されています。

「現代の映像・ドームの二〇年」は、六五年八月六日に放送された番組で、被爆から二〇年目の被曝者の思い、健康や障害の苦しみや出産などの不安が描かれ、劣化がすすみ倒壊の危険もいわれるドームの存廃についての意見も映し出されます。

今回の企画展を準備するなかでドームの保存に関わる番組があることを知り、当館学芸員からNHKアーカイブスに問い合わせたところ、映像は残っていたが音声部分が別に収録されていて残っていないことが判明。アーカイブスの永田浩三エグゼクティブプロデューサーが、番組を制作したプロデューサー宮原利光さんが台本を保管していることを突き止め、それに基づいて新たに音声を入れて番組が復元されました。ナレーションには、当時担当した梶原四郎アナウンサーが再び録音に参加しました。



原爆ドームの解説展示

一〇月一日午後、展示館では、企画展の記念イベントとしてよみがえった番組「ドームの二〇年」と第五福竜丸の保存に関わりの深いドキュメンタリー「廃船」（工藤敏樹ディレクター）が上映され、七〇人の参加がありました。NHKアーカイブスの小納屋雅明館長、「ドーム」を手掛けた宮原さんの家族も参加しました。この模様はNHK番組の「三つのたまご」でも紹介されました。

54年目の久保山忌 たくさんの方々が来館



第五福竜丸の無線長久保山愛吉さんの命日にあたる9月23日には、毎年市民の有志や平和団体による催しが展示館で開かれています。

今年も澄み渡る空に久保山碑やマグロ塚のまわりには曼珠沙華がいっせいに咲き、多くの来館者がありました。

平和を語る第五福竜丸の集いは、16回目。中村博さん(元子どもを守る会会長)の司会ですすめられ、望月新三郎さんの「九条そしてタヌキ三態」、朗読「ミサコの被爆ピアノ」、大石又七さんのビキニ事件についてのお話と上林真理さんのフルート演奏、松平晃さんのトランペット演奏などがつづきました。

昼休みをはさみ午後の部の最初は、保存運動のよびかけ40年にちなんで第五福竜丸ボランティアの会による「沈めてよいか第五福竜丸」の読み語り、「保存運動・思い出す人びと」について堀田貴美さんのお話、群読の会「野火」による「世界がもし100人の村だったら」、右手和子さんの紙芝居「のぼら」、最後は松島よしおとその仲間による演奏で幕を下ろしました。当日は漫画家高橋伸樹さんの似顔絵コーナーもひらかれ、第五福竜丸の航海のための募金もよびかけられました。

第五福竜丸見学・学習のつどい(東京原水協、江東原水協など)は、午後1時より展示館にあつまり、青木佳子

さんの説明で館内を見学し70名が参加しました。久保山碑に献花をしたあとは、マリナーに会場を移して学習会をおこないました。協会からは「第五福竜丸保存のよびかけ40年と保存のとりのくみ」について報告しました。

マグロ塚の会は、50人がつどい、マグロの昼食弁当を食べながら、参加者の近況報告を交流しあいました。

久保山忌句会は28回目、新俳句人連盟は第五福竜丸が夢の島に傾き保存がよびかけられた1968年秋に最初の吟行をおこなっています。久保山碑に集った参加者は、協会の川崎昭一郎会長のあいさつをうけ献花。午後は東陽町・江東文化センターにて句会を開きました。第五福竜丸平和協会から山村茂雄理事が出席し、第五福竜丸の保存よびかけ40年に触れながら挨拶しました。花房凡夫さんの作品に「船員証」が贈られました。

エンジン案内指で読む娘や
久保山忌 花房凡夫

国際平和博物館 会議ひらかる

10月6日から10日まで京都の立命館大学国際平和ミュージアムを中心に第6回国際平和博物館会議が開催され、平和博物館学芸員、建設運動、研究者など海外からの30名をふくむ150名が参加しました。この会議は国際平和博物館ネットワークの提唱により3・4年毎に開かれ、今回はスペインのゲルニカで開催、日本では1996年に開かれています。協会からは藤田秀雄副会長、安田事務局長が参加しました。

全体総会での講演は、同博物館ネット統括コーディネーターのピーター・ヴァンデン・ダンジェン教授(ブラッド・フォード大学)、野中廣務元官房長官、安斎育郎国際平和ミュージアム

名誉館長、ケイト・デュース国連事務総長平和軍縮問題顧問などによりおこなわれました。

全体総会につづいて分科会が19のテーマでおこなわれ、展示館の活動については「核兵器・核被害と平和博物館」の分科会で協会の安田事務局長が報告しました。また8日午後には国内の平和博物館の市民ネットワークの交流会が開かれました。会議は、9日は京都芸術大学を会場に、10日は広島平和記念資料館で開かれました。

なお、会議参加のイギリス・ブラッドフォードのペーター・ニームさん、ジュリー・オーバーメイヤーさん、パキスタンのサイド・シカンダー・メーディさんが、会議の前後に展示館を訪れました。

資料が寄贈されました

- ◆1954年のビキニ事件当時、築地市場での放射能検査の記録映像が、東京都福祉保険局健康安全部より寄贈されました。この映像の存在は、共同通信社の取材により判明しました。
- ◆寺田喜久雄金沢大学名誉教授より、厚生省公衆衛生局編『核爆発実験影響調査報告書(陸上検査の部)』が寄贈されました。寺田さんは第二次俊鷲丸調査団のお一人です。
- ◆同じく第二次俊鷲丸調査団員八木益男さんのご家族より、調査風景の写真、水産庁調査報告書、当時の新聞記事スクラップ一式が寄贈されました。アルバムには福竜丸の放射能調査の記録写真もあります。
- ◆被災船の一隻、尾形海幸丸(山形県加茂・尾形六郎兵衛船主)に関する資料一式が尾形昌夫さんより寄贈されました。ありがとうございました。